

東京成徳大学大学院心理学研究科
博士論文 要旨

スクールカウンセラーの
職業的困難と職業的発達の探索的研究
ーコンピテンシー構造モデルの構築を目指してー

2025 年度

東京成徳大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻

本田 淳子

論文要旨

本研究は、スクールカウンセラー（以下、SC）の職業的困難および職業的発達に着目し、SC が実践の中で遭遇する困難をいかに克服しながら専門性を形成していくのか、その過程を理論的に明らかにすることを目的とした探索的研究である。具体的には、①SC が職務遂行の過程で遭遇する職業的困難とその克服プロセス、②職業的発達の過程において獲得される能力、③それらを統合した「SC のコンピテンシー構造モデル」の構築を目的とした。

研究方法としては、CiNi（国立情報研究所学術情報ナビゲータ）を使用した文献研究と、現役 SC24 名を対象とした半構造化インタビューによる質的研究を行った。文献研究では、学校教育における相談業務の歴史の変遷を整理し、SC の制度の成立と専門職化の背景を明らかにした。質的データの分析においては、SC の経験年数や実践段階に着目し、困難の内容および能力獲得の特徴を比較検討した。

研究Ⅰでは、1945 年以降の学校教育における相談業務の展開を概観し、特に 1995 年のスクールカウンセラー活用事業開始以降、SC の制度化と役割期待が拡大してきたことを明らかにした。その過程において、「チーム学校」の推進や公認心理師制度の創設が、SC の専門性および勤務形態の変容（非常勤から常勤化）に影響を与えていることが示された。

研究Ⅱでは、24 名の SC へのインタビュー分析を通じて、SC が遭遇する職業的困難の構造と克服する過程を明らかにした。その結果、困難の内容は経験年数によって異なる特徴を示し、SC は必ずしも体系的な教育や研修を通してではなく、現場で偶発的に生起する困難への対処を通じて、必要なスキルを獲得していることが明らかとなった。

研究Ⅲでは、SC の職業的発達過程において、獲得される能力を分析し、経験の蓄積に伴って段階的に専門的能力が形成されることを明らかにした。これらの能力は、単なる経験年数の増加ではなく、実践における省察や成功・失敗体験の蓄積を通じて発達するものであり、SC の職業的発達を捉える指標として位置づけられることが示唆された。

研究Ⅳでは、研究Ⅱおよび研究Ⅲの知見を統合し、SC のコンピテンシー構造モデルを試作した。本モデルは、SC が遭遇する困難と能力獲得が相互に関連しながら職業的発達が進行するという循環的構造を示している点に特徴がある。コンピテンシーの獲得順序には個人差が認められたものの、年齢や社会人経験の有無にかかわらず、各発達段階において共通するコンピテンシーが形成されることが明らかとなった。

本研究の意義は、スクールカウンセラーの職業的発達を、個別的な実践経験の集積としてではなく、職業的困難への対処を通じた能力獲得プロセスとして理論化し、コンピテンシー構造モデルとして提示した点にある。これにより、これまで断片的に論じられてきた SC の専門性形成を、発達的かつ構造的に理解する枠組みを提供した。

一方、本研究は限られた対象者による質的研究であり、理論的飽和に至る十分なデータ量とは言い難いという限界を有する。今後は、対象者数の拡大や縦断的調査を通じて、本研究

で提示したコンピテンシー構造モデルの妥当性を検証するとともに，SC 養成および現職研修への応用可能性を検討していく必要がある。